

Title	ジューディス : 古英詩試訳
Author(s)	金山, 崇
Citation	大阪外国語大学学報. 31 p.19-p.30
Issue Date	1974-03-31
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80517">https://hdl.handle.net/11094/80517</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## ジューデイス——古英詩試訳

金 山 崇

This is my second attempt at Japanese translation of Old English poetry. *Judith*, based on the Apocryphal Book of Judith (the Vulgate Version) and expanded quite freely, is a Christian epic like *Juliana* and *Elene*, describing the deeds of a fighting saint. Presumably composed in the tenth century, the poem as we have it today is fragmentary, consisting of the concluding part of Fit Nine and Fits Ten, Eleven and Twelve.

The present translation is mainly based on B.J. Timmer's edition, with occasional help from other editions and books that are mentioned in the Bibliography at the end of the paper.

・・・茫々たる

この地上に恩沢のあるを疑（わなか）った。この女性<sup>によしろう</sup>、かれ万物の主たる君に、  
いと高き裁き主に、世にも恐ろしき危難より護らせ給え、  
と切に仁慈を願えば、其処に至高<sup>きみ</sup>の王の加護の手、

- (5) 差し伸べられあるを知った。天なる栄光の父は、  
この女が持てる全能<sup>ひと</sup>の神への変らぬ堅き信仰が故に、  
その願いを聞き召されたのだ。さてわが聞く処では、  
オーロフェルヌスしきりに酒宴へと招きをかけ、目を見張らんばかりに  
豪奢なる宴席を設けたとか。人々がこの主君、其処へ
- (10) 長老の侍臣共悉くを呼び寄せた。かれら楯の武者共、  
軍勢が将共、蒼惶とその命に従い、力誇る君公が許へと  
馳せ参じた。これは、此の世のものならぬ輝く美貌の乙女  
ジューデイスが、胸中に思慮を秘め、初めて  
オーロフェルヌスを訪れて四日目の事であった。

### X

- (15) かれらその時、威儀を正して饗宴へ、酒盛へ、その席に列せんものと  
赴いた、おしなべてオーロフェルヌスが禍いに与る仲間、  
恐れ知らぬ胴鎧の武者共が。底深き盃  
並み居る人の間を<sup>ま</sup>しきりに運ばれ、また酒盃も<sup>かめ</sup>瓶も

- なみなみと、席に連なる者共につがれた。かれら殺き楯の武者共、
- (20) その命運尽きんとして、それを受けた。ただ、かの力誇る者、  
人々の怖れる主公は、ついぞ己らが運命に思い至らなかった。その時、  
オーロフェルヌス、人々に報い厚き主公、歛び旺んに盃を傾けた。  
かれ、高笑いして怒鳴り、がなり立てては吼え、ために、  
この酷烈なる男の猛り狂い、わめき声あげ、
- (25) 恐れを知らず、蜂蜜酒に酔い痴れて、  
席に連なる者共に、いくたびも、見事に振舞うべし  
と勧める様、遠くより人の子の耳にも伝わった。  
かくてこの邪悪なる男、室の驕れる分ち主、日がな一日、己が侍臣を酒に浸らしめ、
- (30) ついには、かれら、この男が侍臣共悉く極酔し、  
分別のかけらだに奪われ、  
死もて打たれたる如く、  
前後不覚に倒れ伏した。かく人々のこの君、  
夜の闇莫の人の子らに迫るまで、席に連なる者共に馳走した。
- (35) ここで邪悪に心染まりし男、神の覚えめでたきかの乙女を、  
腕輪など美々しくつけ、黄金の環に身を飾りたるまま  
己が寝所へ連れ行け、と命じた。男が傍に仕える者共、  
直ちに己が主君の、胴鎧つけたる武者共が主君の、  
命じたる処に従った。かれら喧しく
- (40) 客人が部屋に赴いた。思慮秘めしジューデイス  
を其処に見て、かれら楯の武者共、  
有無を言わせず、この気高き乙女を  
力まかせに引き立てて  
かの聳える幕舎へと向った。
- (45) その中こそ、力誇る者、救世主が仇、オーロフェルヌス  
の夜毎己が身を安らえる処であった。其処には総金造りの  
見事なる蠅帷あり、この総大将が寝床を囲って  
張られあり、ために、この邪悪なる男、武者共が王は、  
己が寝所に入り来る人の子、ひとり洩らさず
- (50) 内より透して見る事を得、またいかな人と雖も、  
この驕慢なる男が、武者のうちたれか悪事に丈けたる者  
へ、秘かに談合せんため、近う寄れとの  
命出さぬ限り、内なる総大将が姿を

- 見る事はかなわなかった。さて従臣共、
- (55) かの思慮深き女性を、すぐさまこの臥所<sup>ふしど</sup>が中<sup>うち</sup>へ連れ込んだ。そこで、  
恐れを知らぬこの武者共、己らが主公の許へ行き、  
聖なる乙女をかれが幕舎に入れおいた旨知らせた。これを聞き、  
数々の町を手収め、その名も高きこの男、心躍らせ、  
輝く美貌<sup>みよしょう</sup>の女性を、不浄と罪で汚さんとの心を起こした。栄光の裁き主、
- (60) 主権の守護者、これを赦し給わず、主、万軍の将たる神は、  
この男が企みを阻まれたのだ。さて、悪魔の如き男、宴席を去り、  
淫ら心にて人々を引き連れ、  
よこしまなる心もて己が寝床を求めて行ったが、其処でかれは、  
一夜の明けぬうちに忽ち己が栄華の一生を失う運命にあった。かれ、
- (65) 人々の苛烈なる支配者は、此の世で己が無惨な最期、  
雲を頂く大屋根の下、此の世に生きてある間、  
自ら求め努め来たった最期に遭ったのだ。その時、  
力誇る男、したたかに酔い痴れて、  
心の器に些かの分別さえも失い果て、寝所が中央に
- (70) 倒れた。武者共、飽飲したる輩ら、  
その部屋を蒼惶として去った。  
かれらは、あの背信の輩、仇なす暴君を今生の  
名残<sup>なしろ</sup>に臥所へ案内したことになる。この時  
救世主<sup>すくい</sup>に仕うる栄光<sup>ひと</sup>の女、
- (75) この穢れたる男の、邪悪<sup>よこしま</sup>なる心もち目覚めぬうちに、  
いかにしてこの怖ろしき男が命を  
最も<sup>もと</sup>勞せず奪い得るや、と  
大いに心を砕いた。やがて造物主<sup>つくり</sup>に仕うる乙女、  
編みたる髪<sup>かみ</sup>の毛して、掴みしは
- (80) 幾多戦いの嵐に鍛えられし劔<sup>つるぎ</sup>、  
利手<sup>ききて</sup>に握り、鞘とり払った。ついでこの女性<sup>にょしょう</sup>、  
天国の護り主、世に住む人々の救い主が名を呼び、かく言った。  
「万物の神よ、慰めの聖霊よ、  
大神<sup>み</sup>が御子よ、この危急の際に、
- (85) 三位一体の栄光よ、あなたの慈悲を  
垂れさせ給わんことを願います。私の胸中は今や  
激しく燃え上がり、心はかき乱れ、数多の悲しみで

- いたく苦しんでおります。天の主よ、  
ここなる劔<sup>つるぎ</sup>にて、この罪惡の張本人に
- (90) めでたく一太刀浴びせられますよう、勝利と眞<sup>まこと</sup>の信仰をお授け下さい。  
諸人<sup>もろびと</sup>の峻嚴なる王者<sup>きみ</sup>よ、私をお救い下さい。今ほど  
あなたの御慈悲を強く願う気持になったことはありません。  
強大なる神よ、榮譽を分ち給い、榮光に輝く御方よ、  
私の心にかくも憤りあり、私の胸に熱くたぎるものがあるのです。
- (95) その仇<sup>あだ</sup>を討って下さい。」と。いと高き裁き主忽ち応じて、この女性<sup>によしよう</sup>に  
勇氣を吹き込まれた。かくまことに救い求めて主に赴く現世<sup>この</sup>の人々に主は  
一人一人思慮と正しき信仰を吹き込み給うものである。その時この女性<sup>によしよう</sup>  
心裕やかになるを覚え、この聖なる女<sup>ひと</sup>に希望が蘇った。やがて  
夷狄<sup>えいじ</sup>が男の髪<sup>かみ</sup>の毛、しっかりと掴み、男をば双手もて、
- (100) 浅ましき様<sup>さま</sup>なれど己が許へ引き寄せ、この卑しき男を  
何の苦もなく思うがままに扱わんと、  
邪惡<sup>よこしま</sup>なる男、仇なす男の体<sup>み</sup>をば、  
巧みに横たえた。そこで髪編みたる姿<sup>ひと</sup>の女  
仇なす敵に、輝く劔<sup>つるぎ</sup>もて
- (105) 斬りつけた。刃<sup>やいば</sup>はかれが頸<sup>うで</sup>に喰入り、  
半ばを残した。かれ酔いたる上に切傷蒙け、  
悶絶して立てず。いまだこの男、ことごとく  
命奪われて、死に果てたのではなかったのだ。  
そこでこの豪毅<sup>によしよう</sup>なる女性、勢い込めて
- (110) 異教が犬に再び斬りつければ、かれが首級<sup>しろし</sup>は  
寝所<sup>まど</sup>が床へと転び落ちた。穢<sup>むくろ</sup>れたる軀  
命奪われて仰向けに横たわり、魂は、  
突き出たる断崖の下、深き淵なす処いずこかへ去り、  
其処<sup>そこ</sup>で辱しめを蒙け、とこしえに責苦に縛られ、
- (115) 黄泉の旅路の果は、蛇共に取り囲まれ、  
数多の刑罰を逃るること能わず、地獄の火  
の中<sup>うち</sup>にしっかりと閉じこめられてしまうのだ。この男  
深き暗闇に包み込まれては、その蛇の館より  
出でん望み持つことならず、其処にて
- (120) これより未来永劫、終り見ることなく、  
数々の希望<sup>のぞみ</sup>の喜び奪われて、かの暗き棲家に留まらねばならないのだ。

# XI

かくてジューデイス、戦の場で  
 天の主公、勝利を約された神  
 の御許しに違わず、己が力もて輝く栄誉を手にしたのだ。

- (125) その時、この思慮深き乙女、すばやく  
 かの武将が首級<sup>しろし</sup>をば、血に塗<sup>まみ</sup>れたるまま  
 手に持ち、数々の美德備えし己が侍女の  
 主人<sup>あるじ</sup>と二人が糧<sup>かて</sup>入れて敵陣営へ  
 持ち来<sup>き</sup>た袋に入れ、
- (130) ジューデイスは血塗<sup>まみ</sup>れたる首級<sup>しろし</sup>を  
 故郷<sup>いほ</sup>まで携え行け、と  
 その賢き侍女の手に渡した。そして直ちに、  
 この二人の女性<sup>にょしやう</sup>、相共に意気揚々と其の場<sup>いでたち</sup>を出発、  
 やがてかれら、勝利収めたる乙女たち、
- (135) 大胆不敵、敵陣営を逃れ出て、  
 ベトゥーリアを、その美しき町<sup>うらわ</sup>の城壁の  
 くっきりと光り輝く姿を見る  
 処までたどり着いた。そこで、環に飾られた二人は  
 先へと道筋を急ぎ足、
- (140) やがてかれらは、胸躍らせつ  
 城壁の門に着いた。その砦<sup>うち</sup>の中に、  
 武者らは起きており、人々は寝もやらず  
 見張りを続けていた。勇気ある乙女、  
 ジューデイスの使命<sup>きむい</sup>の旅に発つ際に
- (145) 心打ち沈みし人々に、伶俐<sup>きと</sup>くも命じたる処  
 に従っていたのだ。おりしも人々の許へ  
 いとおしく大切な女<sup>ひと</sup>は帰って来たのだ。そして時を移さず  
 思慮深きその女<sup>ひと</sup>は、この広き町のうちより  
 たれか一人こなたへ参り、
- (150) すぐさま城門<sup>うち</sup>が中へこの身を入れて呉れるよう  
 命じた。次いで勝利の民にむかい  
 かく言った。「まこと有難い事を  
 お伝えします。皆様には、最早心に  
 歎き悲しまれることはなくなりました。

- (155) 諸王の栄光である造物主は皆様<sup>つくろ</sup>に有難くも  
御仁慈を垂れ給いました。長い間耐え忍んで来られた  
数多の苦しみに対して、輝く繁栄が約束され、  
栄光の与えられた事は世に広く知れ渡りました。」と。  
かくて、この聖なる女<sup>ひと</sup>の、高き城壁越しに
- (160) 語る言葉を耳にするや、町の人々は  
歓喜した。軍勢は喜びに酔いたる如く、  
砦の門目掛けて人々は馳せた。  
この天の主が乙女にむかい  
男も女も、大勢<sup>あまた</sup>かたまり群れを成し、
- (165) 幾多の列成し、連なってどっとばかりに押し寄せ走った、  
老若を問わず、幾千人とあまたの群れ成して。  
喜びに沸くこの町の人々の心は、  
ジューディスの故郷<sup>いよ</sup>に戻りし事を耳にするや、  
なべて喜びに躍った。そしてすぐさま
- (170) その女<sup>ひと</sup>を恭々しく城内に迎え入れた。  
黄金に飾られし思慮深き女、  
己が忠実なる召使に命じ、かの武将<sup>しるし</sup>が首級を  
包みより取り出し、血に塗<sup>まみ</sup>れたるまま  
町の人々に、戦いで己<sup>あかし</sup>が首尾の証
- (175) として掲げ見させた。  
やがてこの気高き女<sup>ひと</sup>、町の人々皆にむかいて言った。  
「勝利収めたる勇士らよ、人々の将<sup>かたき</sup>たる方々よ、  
おわかりであろう、あの不惧戴天の敵、  
夷狄の武将、今は命なきオーロフェルス
- (180) が首級<sup>しるし</sup>をはっきりと御覧あれ。  
この男、此の世の中であらん限りの  
罪深き行いをわれらに働き、深き悲しみを与えて  
なおその数を重ねんとした。しかるに神は  
かれにこれ以上寿命を許し、われらを
- (185) 数々の苦悩もて悩ますことを赦されなかった。  
天佑神助により、この男が命を奪うこと  
が私に出来たのです。さてこの町の方々、  
楯の武者の方々、一人一人にお願いしたい。

万物の主、栄光の王<sup>さみ ひがし</sup>が東方より

- (190) 輝く日の光を送られたとき、  
直ちに戦いに馳せ参ぜられますよう。楯持ち進み給え、  
胸を守るに楯板持ち胴鎧つけ、  
きらめく兜頂き仇なす輩の陣中へと。  
輝く劔<sup>つるぎ</sup>もて大将共を、命運尽きたる
- (195) 主領共を斬り斃し給え。敵は斃る事  
必定。皆様は、強大なる主が  
私の手を通して示し給うた如く  
栄光を、戦いの栄誉を得られるのです。」と。  
そこで、勢いこみ、勇気ある軍勢は
- (200) その準備を直ちに終えた。名ある人々とその仲間、  
兜頂く勇士たち、その日の明け初<sup>は</sup>むる頃、  
この聖なる町から、勝利の旗  
掲げて出で発ち、直ちに  
戦場へと赴いた。楯は騒がしくぶつかり合い、
- (205) 高くあたりにこだました。森の瘦狼、  
また人の多く殺さるるを貪婪に待ち望む鳥、  
黒きわたり鴉は歓喜した。ふたつながら、  
この武者たちが、命運尽きたる者共の馳走  
をして呉れようとの志<sup>こころ</sup>を知っていたのだ。次いで
- (210) これらが背後より、露含む翼もち、黒き羽毛<sup>はね</sup>したるもの、  
餌食待つ鸞が飛んだ。尖れる嘴の鳥、  
戦いの歌を歌った。武者たちは進んだ、  
勇士らは楯に、丸くふくらみたる楯に  
身を護り、戦場へと。かれらこそ、これまで
- (215) しばらく異国の傲岸<sup>ようさん</sup>、夷狄<sup>ようてき</sup>らが侮蔑を耐え  
忍び来たった人たちであった。かれらヘブライの軍、  
軍旗の下、敵陣営に着くや、  
とねりこの槍の応酬にて  
この怨みを、手ひどくアッシリア人共に
- (220) 報いたのだ。かれらその時、  
すぐさま矢の雨を、戦いの毒蛇を、  
堅<sup>つよ</sup>き矢を、角<sup>つの</sup>の如くひきしぼりたる弓



- より放った。勇猛なる武者たち、  
喚声もて襲いかかり、勇敢なる  
(225) 敵勢が中へ槍を降らせた。勇士ら、  
この国の人らは、敵の者共に怒り、  
心苛烈に、決然と進撃し、  
蜂蜜酒に酔い痴れた、年来の仇が睡りを  
激しく醒まさせた。武者らその手もて、  
(230) 鞘より試練の刃もつ輝く飾りした劔  
抜き放ち、アッシリア軍が勇士ら、  
悪しき企みしたる者共に烈しく  
打ちかかり、己らが力もて斃すこと能うる者、  
身分の低きも、力誇る者も、  
(235) 息ある敵軍は一人の容赦もしなかったのだ。

## XII

- かくてこの朝、武者たち  
息も継がせず、異国が軍勢に次々と襲いかかり、  
やがて敵が大将共、猛き心の持主ら、  
ヘブライが軍勢に、激しき劔の舞いを  
(240) 見舞われあるのを知った。  
かれらは長老の従臣共にこの有様  
を告げに赴いた。この旗もつ武士共の  
目をさまさせ、恐れ戦きて、  
蜂蜜酒に飽酔したるかれらに、  
(245) 怖ろしきたより、曉の恐怖、  
凄まじき劔の応酬を告げたのだ。わが聞く処では、  
その時すぐさま、死を負いたる勇士も睡りかなぐり捨て、  
あの悪人、オーロフェルヌスが幕舎へ、  
この気落ちしたる人々群れ成して  
(250) 押し寄せたとか。かれら、かの恐怖、  
ヘブライが軍勢に見舞われぬうち  
己らが大将に戦いの事  
いち早く知らせんとの志であった。かれら皆、  
武者共が首領と、かの輝かしき女、

- (255) 高貴<sup>ひと</sup>の女ジューディスと淫らな、恐ろしくかつ猛々しきあの男  
とはこの美しい幕舎のうちに  
共に居るものと思っていたのだ。しかし武者共がうち  
この武将の目をさまさせ、  
<sup>ある</sup>或はこの御大将の聖なる乙女、主なる神に仕うる乙女、
- (260) への御処置いかに、と敢て尋ぬる  
勇氣ある者はなかった。かの軍勢、  
ヘブライの人々は近づき、堅き<sup>つるぎ</sup>劔もて  
大いに奮闘し、輝く<sup>つるぎ</sup>劔もて  
<sup>むかし</sup>往昔よりの争い、旧き怨念を
- (265) 激しき勢で晴らした。アッシリア軍が栄光、  
その日の業<sup>わざ</sup>のうちに打ち砕かれ、  
その誇りは辱かしめを蒙けたのだ。武将共うち沈み、  
心いと昂らせて、己らが大将の  
幕舎を囲んで立ちつくした。やがてかれら、
- (270) 慎しみを棄て、一せいに声張りあげ、  
大きく怒鳴り、激しき怒り齒で忍びつつ、  
齒噛みした。アッシリア軍が栄光、  
隆盛、また勇名も、その時失せたのだ。かれら武将共、  
己らが貴き主公を目覚めさせんとした。がこれまさに従勞に歸したのだ。
- (275) 武将たちの一人、やがておそまき乍ら  
勇奮い起こし、心せかれるままにやむなく  
幕舎がうちへと大胆にも踏み込んだ。  
その時見たのは、血の氣失せ  
<sup>たま</sup>魂奪われ、命とられて横たわる
- (280) かれが主公の姿であった。かれ其の場で忽ち  
体震わせ床に倒れ、己が髪<sup>かみ</sup>の毛も  
纏えるものも、怒り凄まじく  
引き千切り、暗き胸の内して外に  
待てる武者共に、かく伝えた。
- (285) 「此処にわれら自身の破滅が、その近きこと<sup>しるし</sup>の徴が、  
明らかに示された。いまわれらの破滅の、  
共に戦場にあい果てるの時が、数々の  
苦難と共に押し寄せて来たしる<sup>うち</sup>しなのだ。この中に

- われらが大將、首を搔かれて斃れいるのだ。」と。これ聞き、
- (290) 一同悲しみ、武器投げ捨て、心打ち沈んで  
忙て逃がれんと、その場を去った。力得たる軍勢、  
追い討ちかけ、敵軍のあらかた、  
やがて刃に見舞われ、戦いのうちに斃れ、  
勝利の戦場に伏す屍となった。
- (295) これらは狼共の歎びとなり、また人の多く殺さるるを  
貪婪に待つ鳥共の慰めとはなった。  
生き延びし者共、相手の楯を逃がれたが、  
かれらの背後より、勝利の榮譽に輝き、  
榮光に意気軒昂、ヘブライの軍勢は進んだ。主なる神、
- (300) 全能の主が、その裕き心もてヘブライ軍を助け給うたのだ。  
そのとき、かれら勇敢なる武者ら  
恐るる事なく、輝く劔もて  
敵軍が只中に征路切りひらき、  
楯打ちしだき、楯ぶすまを切り裂く。
- (305) 弓の武者、ヘブライが人々、  
戦いに憤怒し、従臣らその時、  
槍の闘いをいたく望んだ。  
アッシリアが将ら、  
憎き民があらかたは
- (310) 地に斃れ伏した。故国に命永らえて  
帰り着く者は僅かであった。勇敢なる人々、  
帰路に着く武者らは、累々たる屍の中を、  
血のにおいにむせかえる殺戮の場を通して引き返して来たのだ。  
この国の人々に、その敵、今は斃れたる旧き怨敵の
- (315) 血糊着きたる掠奪品、美々しき武具の類、  
楯に広身の劔、輝く兜、  
高価なる宝の数々、それをその手に収める  
好機が到来したのだ。かれら祖国の守護者たち、  
戦場にて敵を撃ち、
- (320) 輝かしき勲建て、劔もて  
旧来の怨敵を撃ち滅ぼしたのだ。命持つ人々がうち、  
かれらにとりいと憎き者共は、

- 軍勢が道に斃れ、横たわったのだ。この民らなべて、  
世にも崇高なるこの民は、
- (325) ひと月が間、威風堂々、髪編みし姿して、  
ベトゥーリアが輝く町へ、  
兜を、腰の短剣を、灰色の胴鎧を、  
人々の黄金もて飾られし甲冑を、  
いかに賢き人と雖も語り尽くせぬ程の
- (330) 見事な宝物運び、持ち帰って来たのだ。  
これ悉く、戦場にて軍旗の下、  
豪胆なる武者たちが力にて得たるが、  
勇敢なる乙女ジューディスの  
思慮深きもくろみに依るものであった。かれら
- (335) 勇敢なる武者らは、報償としてその女に、  
オーロフェルヌスが劔、血糊付きたる冑、  
加えてまた赤き黄金の飾りある裕やかな胴鎧、  
その他武者共がかの傲岸な大将の宝物一切、  
また宝環、輝かしき数々の宝など大将その人の遺せし物一切、
- (340) それらをかれらは、輝く美貌の  
思慮深き女に与えたのであった。ジューディスは、  
栄光はこれみな万軍の主よりの賜物とした。主は  
地上の王国での栄光を、また天国での報いを、  
天の光輝に包まれたる勝利の榮譽を、この女に
- (345) 授けたが、全能の神に永久に変わらぬ真の信仰をこの女が抱いていたからだ。  
まことに、この女は長らく切望した報いが  
最後に得られることを疑ってはいなかったのだ。この故に、  
風、大気、大空と広漠たる大地、更に加えて荒れ狂う大海原、  
また天国の歎びを、その御仁慈により創らせ給うた気高き神に、永久の栄光あれ。

(後記) 私の参加する古英語の輪読会の諸兄に、この翻訳の動機を与えられた事を、紙面を借りて末尾乍ら感謝する次第です。 1973年9月13日。

## 文 献

(底 本)

B. J. Timmer: Judith, Methuen, 1966.

(その他のテキスト)

- Bright's Old English Grammar and Reader, edited by F.G. Cassidy and R.N. Ringler, Holt, Rinehart & Winston, Inc., 1971.
- E. V. K. Dobbie: Beowulf and Judith, Columbia U. P., 1953.
- O. Funke and K. Jost: An Old English Reader, A. Francke, 1967.
- R. Hamer: A Choice of Anglo-Saxon Verse, Faber & Faber, 1970.
- B. Huppé: The Web of Words, State Univ. of New York Press, 1970.
- F. P. Magoun, Jr.: Beowulf and Judith, done in a Normalized Orthography, Harvard U. P., 1966.
- F. Mossé: Manuel de l'anglais du Moyen Age des origines au XIV siècle, I Vieil-anglais, Aubier, 1950.
- S. Suzuki: Old English Poetry: Religious Poetry, Kenkyusha, 1972.
- Sweet's Anglo-Saxon Reader in Prose and Verse revised throughout by C. T. Onions, Oxford U. P., 1954.
- Sweet's Anglo-Saxon Reader in Prose and Verse revised throughout by D. Whitelock, Oxford U. P., 1967.
- A. J. Wyatt: An Anglo-Saxon Reader, Cambridge U. P., 1948.

(翻訳)

- R. K. Gordon: Anglo-Saxon Poetry, J. M. Dent & Sons Ltd., 1964.
- R. Hamer: See above.
- 羽染竹一: 古代英詩選, 原書房, 1963.
- B. Huppé: See above.

(文学・歴史関係)

- 英米文学史講座第1巻中世600—1500, 研究社, 1962.
- G. K. Anderson: The Literature of the Anglo-Saxons. Princeton U. P., 1966.
- G. K. Anderson: Old and Middle English Literature, Collier Books, 1962.
- S. B. Greenfield: A Critical History of Old English Literature, New York Univ. Press, 1965.
- K. Malone and A. C. Baugh: A Literary History of England I The Middle Ages, Routledge & Kegan Paul, 1967.
- G. Sampson: The Concise History of English Literature, Cambridge U. P., 1965.
- E. E. Wardale: Chapters on Old English Literature, Routledge & Kegan Paul, 1965.
- C. L. Wrenn: A Study of Old English Literature, G. G. Harrap & Co., 1967.